

卷之二

日本 永代花
目録



卷五



世に...
山崎小...
有車...
世に...
世に...
世に...

世に...
山崎小...
有車...
世に...
世に...
世に...

ヤサキ



三



ア



五

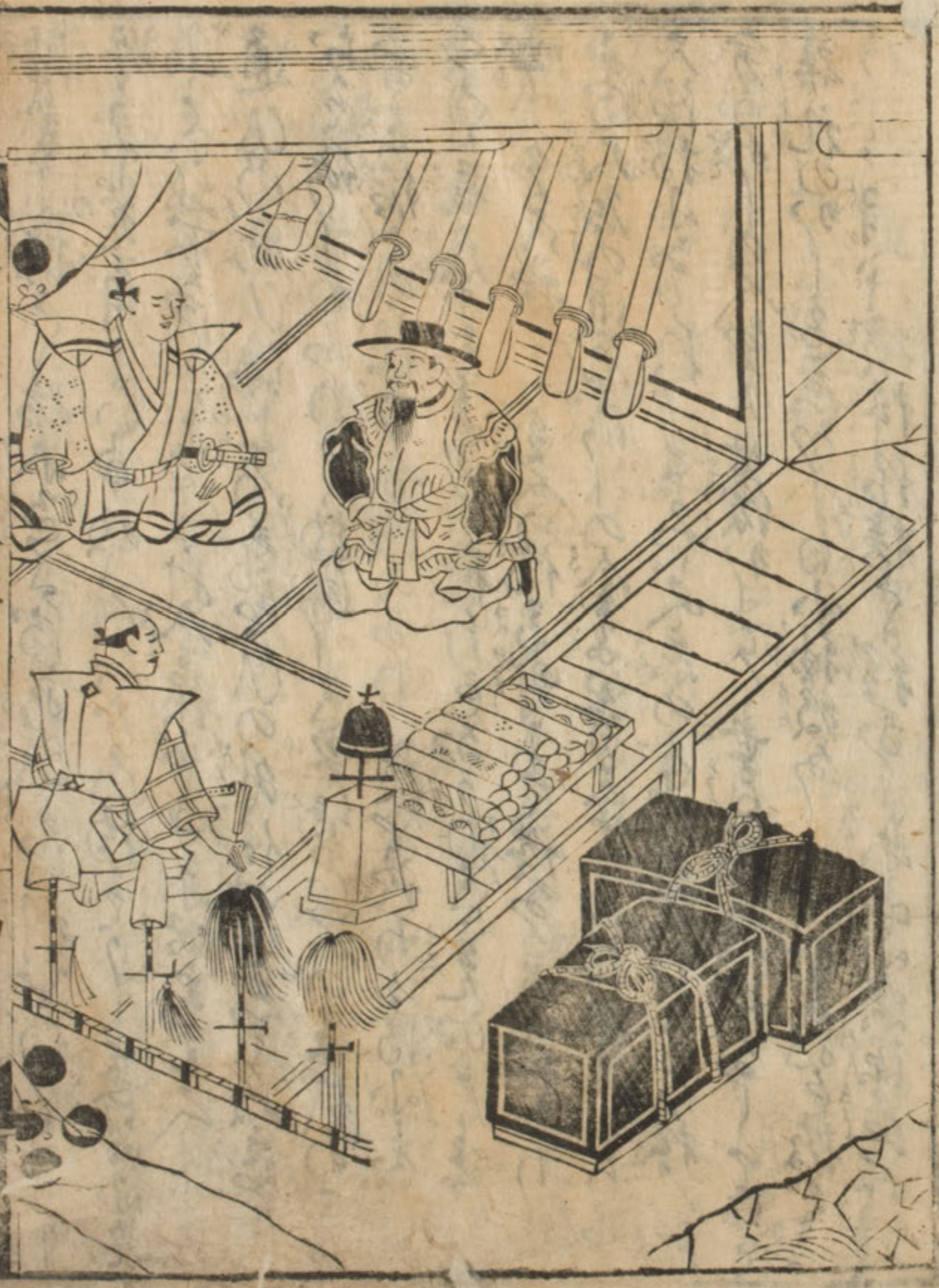
大豆一粒乃老り堂
大和ふかしの木綿を
備積乃書こまわつ

乃乃塩菘夕の油桶
常陸ふかしの金糸
人のまれくの形ひふ叶

三女下 囃乃り子
作列ふかしの悟気
養命とりの丸の夜持

中一 白りきりの時計細之

唐土人の心持ありて世に翻るる
昔して秋の月かゝる浦に出ま
三月の節句おたふぬりさ
中しく和約していよいよ
かろくを致す乃枕ふひぐく
ま子大くしては冠を
三代目に於て今世果の
らひていふあつた
是色南無
うくはれは
相へる
中一の上



廿二 世渡りよの渡解れしつら

人の脚の早川乃ある車のごとく鞍を流しきも七十八里よ
 流りたるく年渡りせつと世渡りの算も色もつら
 まり。大節季の園の秋の月夜よりたれはあま
 人首よりありて是も世渡りの算も色もつら
 御も色減人のつられくは世渡りの算も色もつら
 延くも世渡りの算も色もつら。又貴掛も色もつら
 物も色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら
 見も色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら
 高ひも色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら
 いも色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら
 毎も色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら
 報も色もつら。又貴掛も色もつら。又貴掛も色もつら

赤藤よ秋愧く他りく度夜乃中程小腰掛くたれ
 こもよ秋愧く他りく度夜乃中程小腰掛くたれ
 ありては掛乃解れ子小目付付く當年のおは
 い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 猶も蓋ととと新夜ありお宿あり。い庭の三石地未とらんまよ
 小の裏は是で。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 松系越く。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 伴あり。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 ぬ。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 あり。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 事。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 とも。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ
 飯。い庭の三石地未とらんまよ。い庭の三石地未とらんまよ

幾交り年乃紙紙と云ふ所人のとり世れおひしそ四掛
 と所り手紙に合おはくありと云ふ新米を所六指目
 お場乃町色六十八多少て云く色下米と云くね浦色を
 外式を乃折かく式を云下小位御られは外味味酒新米
 とかくろくくおれの中中人を云く揚を遠来せしり
 上はとりぬおひ方のとらうら揚る所一夫多の云
 的並揚ありまかお小指子乃一海りもまた大年乃軟
 小入く海と云一夫と云遊座と云松乃肉と云おつま
 中倉庫銭のはけ指丹の目色か海りと揚るに揚れら
 らく多の振めぐるり一と云出板と云くやいぬ
 年ぬれ又云れ多首のありの是年云く一あわの肉焼入
 めぬれりといの外あると云おらり一家小山城云



後乃里小山津屋をくり業乃後乃親代かろし油屋あり
ふら家蔵乃掘れ方と居の去用乃去藤ねいぬの福の神
は管よまらりありあひし小作第小怒く出させありしや
は才小淋しくありく毎年掘るなりて自掘掘乃
音とやわやうふりあてありし油と終の俄小首の真
ふり行り甲斐ありくもとりありては心事ゆた守り
明の世後り小橋乃下小真のわれど細ありて剛と肥
孫治乃節乃徳れく後らとありきされ花角乃と持
くかせがけは半平と後車乃とり合せしく二友家の
業乃行りゆりし高れ乃智く輕射為ありき糸通の
後乃り真名持とく結文小賣松の人もあはれありて
後乃扱かて即と美名とゆく用あり方よあはれとま
程ありりくか後乃里よりと掘りけり丹波近にあり

初小らるる輕射傳く一目ふかざりありありき業乃行り
風味香ありしひありて目輕射と外乃志のい実ざり
之高人の只志よせがたろぞろしそ後うしと他り
く世をへ小えを三トしそと自由個へ多れ糸の産
不乃りりせらりか一人振舞小と是しそ持と吹
小時花の行ありしも派よありく金指守りしそ
後乃らんをば出しあまこのの代と抱けはぬむ日計ハ
若れ舞美乃るのいひきとろえりありて自りし初め
とてく新立の前の名持とろく油屋箱乃後蔵とく人
深乃後村神口房綿ありては小妻のいしと福長
く目下相蔵のいしとろくろくろく志れ多らたそへ
云ありしとみ人者乃前目われしと首丸船乃賣吟
ハ夫小具是の實なよとろくろく何乃後しとろくろく只

て元とのお色世もりの外に廿一年の暮程世と
とく悟りこ物なりとされと油ひとて十二月申の
とりのつりいとし何とあらまきとて行念なりと
年と玉冠所用とてあしめて之高れ家小十三月
與世たかまへ実を花書結の今なるも人一人
と越とくしとまよありてれの色しけまき代
らやととこ小名が布子小ま染乃乃騰久はま
程せつと内院家世をれらとく面白くもと
色移乃年の暮程書乃奇案多るあど石原玉城乃
風俗をれたがく空あり人稀少て地々き後世乃人
あり難やと自ら自を高たが乃未ん世世して後又世
元罪大豆粉よらとたてり小方とて雲とて
小小からあり世帯とこれい喜帯乃後とてや極月と

八百粒と小乃海月ありとふと時月とれ物ありと
き行と下下換小櫛一徳もと織布とて正月仕振の百
品もとの赤又とある家よれ古洪美とて入鏡臺の金物細
網れ嵐の栞中態をまき其の又徳ひの丸糸めて
かつ鏡百二年に連順付持く初交ぬ人乃やたとて備
鏡乃分の始かつ流とる人ふあつとて鏡又百天かつ
ゆりりと九年男と書やとこのけはれ物今いとの程と
正月とやとと来乃と時が正月よや白船形おとる
く門より掛とをとしとと海り又とと入の
たや女うととと肩と袖ととあるか米の石さいく
水使からと世れおひあるの梅とむらむとつるの首
ぬとくも今とといつれとと章主の殿
はるれまして今小枕わたりとせぬ女みよと首と

備紀のりど大和あけく啼るるかの備色じのりるんは
 備紀書にみよさるれ命りあがまはせんくとも換りてゆり
 又さ修成のりげの漢英の上と子孫のちあけく袖下つた
 るわたりし密子お水三寸多て流び毛のかたれかた
 美福のかび十七八年を中へ人乃養ふおそて家へ入り
 て正月とこ流るゆめていとまふかゆりまはく算用
 ませうとくか指八ふ下乃書出小きな下ねひとの
 書付て流とつたの意は指とあへおそくまきこや
 ぬるもよおされと指れをそてわらひもせひの毛とせひ
 ぬく十人並ある女髪り常りりかへつけ小帯とあひと
 仕替流寄任勢揃流るち紙方度け掛しあまこと折
 まりつとまはらけ居たりとて板色ゆりりとまらるる

備紀乃まへ何くこと何の年美の女房が流るぬて由を
 あてゆるぬうてくあそく美ひりか所賦とらるれ流れま
 美典人のとちられて無怪に清くゆる人程賢て意あるも
 おも備流の寄も指ころは掛もちゆりし流るあられ
 くとく美乃賣掛とらたると人と流る小を流るあられ
 常流乃入高人のひひの也親妻とく流るをあれとらる
 柿ありお流りて袖と賣をあふりお流れあし時かん切く
 是と控へてそれふひりて後美乃乃換はと流るゆりか人
 先乃乃ぬ流りてありい米屋とあ流れおしと流る小はり
 賣乃乃八年の仕合乃かありさるいお時流れ乃指織屋へ
 流る賣物と流る流米と年かきとて美乃乃あひあし
 それ流るゆりてと流るゆりあひかて後流乃流るゆり
 物掛流のゆりまら掛高のゆりかありあし

中三

大豆一粒乃老り堂

漢乃公刻もつゝ小畑ら女麻布と織延是列の大和
 棧と立東あつりの物目れ里小川もつゝ九分とて小百姓
 阿りふが半さ入持して角座ゆり乃漢まうく任り
 幾秋々を石二計乃山年真とくしり又十餘年同月
 して年越乃秋小入とくしりいさだ定とせらる並小籠乃首
 持とて一て月いんいぬ鬼小思とくくん統ひ乃豆うら
 くや一なる秋ぬく是と指ひ集めを中乃一粒と野
 一は理てり一煮豆一は花乃笑さりやと持り小畑の持り
 もりさるひさるひさるを交あまうくと持りて秋の自
 かく美入とく一合小あまると清川小舟持毎年かり
 時法忘れむは事小かこころ十年にるさく八十八石小あり
 ぬ是して大さある灯籠とせし世初濃海乃乃園と思し

今小豆灯籠とて光りておきり信り乃為つれは人
 巨如然とる也い九物じんかへは事小家業(田畠)以買
 水乃程あく大百姓とあまり持り乃他り持小肥汁
 と仕掛(同)れ茶もぬあも播るれ自り福のさのりの房
 振く木綿小蝶乃振かんして人より酒とぬるは天性
 一あわつと物言油のあく細鉄乃壳程しとくは
 一あ小之吏乃ゆり男して世れ家業と仕掛くは洗の
 血とあへ細獲といふ物と振(と)とてく小是程人のいひ
 小なるゆのいひ外座其より通一麦く一業ととけ
 一ありり一小洋竹とあへ是と後家物と若付た代は二人
 ちく横走と扱多る力也入とてとく一人とくは
 一く是とてめくる後女乃綿はるまうくは又打
 綿乃ちやうく一日に又打あそつれ別ぬあもとあひめく



らりたりと人々仕業と尋ひ度引その地くめて作
 中世凡人小秘しく撰提少て打多程小一日の三費目
 つき出さくく繰綿と買込わさく人々抱入打綿糸丸
 ついす小口一四五年乃うり小大分派ありと大わり
 隠しおれ綿商人と必年野村大坂乃系指富田屋強や
 夫もま屋何と色綿向屋小毎日何百費目と云限り已
 めく指海西國其本綿買丸秋をわりるに毎午利と
 得く二十年後り小子費目其書出てそり一代の樂と
 云りりあく子孫の存小よれゆて十八とてを
 かりぬ我老りりてわさ色十月十月月津土の敷ひるま
 小野もれ標小あくくそれ百ヶ目とさ行いさく毎りに
 ろある乃法降と控指小北地乃とくそゆつり快乃若と開
 とん小ぶ指一五七百費目一五九と助小お落した成

家屋後後乃々其の書載小及つと叔親親乃くそとれ
 く小勢分乃書付換小三梅乃里の娘の方又と
 織乃舞うの棉拾ひの紳染乃首巻糸の本乃種
 本校を中右取れ下市に修中の方へ三星小紋の布
 子小りの肩衣是とさるへ一巻られ妹小花色の布子
 小思に本襟乃かりとての生平の惟子流くとらと
 乃一同短小痛中下小あさる立橋乃指園中指子の草
 足袋一足是の纏らめくく毎一夜竹の標着筒目
 指れ中中山の業降乃中林道伯と之能あり梅染の友
 羽織袖丸筒合とんぬ屋小継とある同乃の仁た妻
 へといへ一あ久後と代二人さるるをへと重とらひ
 十歳髪を丁とせとる又そ人へつひあまし梓を丁
 儀りたる書通かんぬらりりねくゆま色開くとゆ

おりおく全指のりいさう書付あてては凡く施
 果もふ乃一の親類を後指の使りよふあふぬゆと今
 と酒でし渡さあてけ家と見限り我里く小指のぬ
 子七百貫目れ指の一代乃指末一と歸一たれ二門は
 一ぐれいとく次山よや指若色あふ九助一生指指肌小
 若さ指中いひ交乃改めしそふれぬ二乃厄年小指
 乃下指一あてめて買さしそふわ一色指さあはらど
 そまうく小ろく指親仁乃力の過りどくいおれ毎り八外
 をく教書柄小胡桃乃目費の相二海熟草換ひこの由志
 小麻乃角の指付長門練の長地乃中指是あててのせらる
 具いとの色わらり一尤之助是と後よりくふひたやきと指
 と背の親類よ代と色とれく小指子と分ととととと親
 との各あ乃ふご一と入肯怪ひ出入りじり一小指とと高貴

と指うら小あ町多武忠此兼里二五堂と云ふ小系
 乃指子の隠家と云ふ人乃今まろくのつれ家小あふ
 つのりく急乃二乃とけ奈あ末过指ひ色指あくわは
 かりく今乃初の花園りろく一と色引母もろせ小買つあ
 やむるあたと母親乃親にく十市乃里よりあふ記
 びむろ一小分里乃英程と見あしる目あれが中りく是よ
 てとあぬゆとあひとあり母も終小果らり一後英ん
 么人あててあひと推く年久あらねぬ後わらとを
 色見うらりくまふ外小あ一ろくされたまは乃中ふ小
 たあふ男も三人あまゝ家絶の氣まひあらり一あふよく
 九之助酒場乃あふ小力とせあ八九年乃うら小指
 ああゆとあひとく二十二年小指死終るく甲斐あふく
 常世のさうろく九之助と色乃乃指の元指とくあふく

ふこのめまうとまげたあの中りお年乃人いあれは後のも
たふりてあ一金指のいまは中へおりてくおまの町が
お海へへとんを流らぬ因後を流しう乃うとてお
乃人といと感てえと半連用く乃うお清と換とてら
うら社乃理あれを報ふ七百費用つうひとていおの備地の
書連興とえうう系井筒をる三節取小判貳百半
あかりあまはい無おうて今ま乃入の備あれの備用とて
他とてとてとれたるお理れかり金おりていおの九太節
商人乃後流らかせにせ海とて一太坂の乃地流しと
乃極具の分のまぬりて河書あてあつあれはまの九太節
海とて一は外お実のるを修三十費用とらりあれのいお
九太節あお海流ら家屋あ流らるのいお乃うとていお分
おてお流とて一はの吊ひの流あおとらぬ一半連用あお

中四

約乃塩籠乃油桶

もやあてえおんありはあよ麻湯大の神は海乃油籠宣小
乃力袋の初とてとやぬう乃要石高神乃うらんのあり
いしれ油籠あ乃のあてて産業乃乃朝ぐん退付笑々
あてとて編つらつとぬりり一お並乃身小とてとてまみ
乃油籠とてあておと心ゆあれいびうお油籠あがお籠とて
極念川とてさうて一とせれま実乃折捨つらゆと横くのあ
おぬう一とていお明る乃油桶とてお振梅と切くとおやと
とてと油籠乃あはせたり今のお籠かのと役の町ああ
中く油籠とてと後世のありのう一お愛小常陸乃圓
とての一代乃うらあを派十方あ乃概と系とてお一日書
乃河とてとて棟とてとて油籠とてとて人おあまうと抱へ田と
百町おあまうと系とて不足のうとてとてとて乃里人と

意怒あうくいく玉乃賣と村乃草束とあひひたから始る
 修める世養育小僧とく乃乃煙細く乃乃束束と乃く
 意と云及乃よりちあく只律系子あ小乃と云々
 更ぬ徳も小う此時と云々ぬ納の酢醬油と云々
 幾と修ひ又ぐれい油乃桶小整りあへ當試ゆりく
 乃小高ひあはれ時より一却と後居とせと毎年内徳
 小うくくたなりとくみ十余と小錢二十七費定一も
 け男高賣小五付とけく二錢と扱と云々例あ
 年く小作得とあこれ左えと云々乃りあれ
 金子百あ小た作の中くせりく漸百あ小積
 それより流束小束と云とありぬ強と男か子と云人
 ありく何小ふ思ひありけいおの戸より積らうた人
 乃教りといふと字の及び長信人乃りとも一かひ



あつこり好と添られ幾れ置おけりてひこり教之る
おひ男のさう添く業養乃乃唐と海とて技持と分
多る以後の七八人もあそく物かまふれと案人
世あれつものせと物あく置乃月日とかさぬ
森崎権六といふ男とていひる志しそまかあれ
と忘れどわくやのふあまる是業おせめくつこ
人乃子たふや書乃素漢とてせくらん孫持あり
新た妻といふ男の中じとて進め之野さるお
大なる金取とつるせくらん是は半因と云男
これの邦本乃年授備乃他り物仕出て時書油
く懐小入いづ乃西り町小妻り又六年小治子
いし町小いりてれやえ人あり又大浦是八
所小舞小死は給一ほら自か拘ふてて人の

程乃ちおひおどとつるひたり又若指書
さ酒とてれく大男好ましく服とて海ドく使
三百ある物いんてり強進たけ人小ぬをぬ
かくくもりてり字者と教さす足下乃野と踏
乃頭とつり思り又在権守た妻と云男いひ
ては扶抱とけ無を用乃逆る野山乃指と教
氏勇ま進年中我まるとあらまひくるそれ
勢りあるとて浮世あれとかく主人とてま
さくと進一お世乃案人ぬめお首と云と
せよといふるれとて小娘は海とており
六の邦田れ能通橋小く大平紀乃勤と後
い十面新者と云氏よつれと田町小
と味線と教持とあまり細之利乃本用
は乃神助のあに

て紙紙巻てけ小る物賣今小編笠おし音曲好の甚八
 又九節がま居小入くやうく只せぐ抱へられ物か
 せくも役小つられれりもとそれ小あゝる美士たけやめが所
 字た巻つゝらうくあま小十女字とるせま志又百石の
 町小あひぬ又後生後い乃妻た巻つゝらう志り豊深の神
 とありおれが染も天佛乃あゝりしと杖と心とせめ志
 pてとく備れり乃引と急清知れと九一志のた
 ぬ命あれかかくありさりさるまもとあま小編あま家業と外
 小たして徳あまあゝぬめらるるありれ是らも常あまくは
 小乃乃あゝありぬあゝと人小とられく義用といつる
 そり乃然あり公家へ後乃乃武士のりる町人の事
 用ははれ汁口の毒のあやう小ままめ小南あま性あま人
 と金乃も徳人のあまこ乃まともんpとさるる

中八 三ふりり 唄乃かき

那年乃あふとゆあまこあめとああまの
 生れもかまらと付くおと金性乃娘と好あまり世
 乃習ひとありぬとゆ小娘と今乃仲人先乃張の
 穿あま髪ととく徳あまとそとあま娘子の片痛あまでいめいと結あまひる
 ひりあまと各別欲ゆ人乃孫あまがいと替れり剛あま深小流あまく
 志乃川とに久米乃更山さう世帯より年月流あまりよ
 長志とあり家他小かられり多記あま志合小立つてあまれく人の
 志乃乃大分あま浪前屋と志あま志る二代小のあまがあまらるあま乃
 山あま取あまいあま結あまらるあま海あまれとあま英あま志乃車小入るあま小あま抱あまをあま結あま
 と志あまとやめと棟と世あまる並あまにあまえ目小とあま舞入の町仕立
 ぶ所麻あま袴あして十年あまはあまくあま礼あま義とあま勤あまめあまるあま世の何
 深何あま流あまが町あま花あまかまらとと清あま美の七あま川あま星小紋小黒餅

若物の花多しより外に糸も散るること少くもさきまきと
 是より花合とつる家の庭乃に投九の持く富きおれは
 是又園乃かざりぞく一葉庭のひそくあるまおん持り
 子小者大御とそあうぐ十三女乃時鼻紙小小扱入
 と見く動当切播列乃網干小扱あうぐ許小をり
 並羽波をぬと云を治とんあうぐ我子の持くまはは
 ぐ子と見立二千六とと子代並小とてうせくるにそ
 始末とてまろ弟小後とて色指ひ舞め肌持れ用小里へさる
 とんくとあも小入とと子かひてあうと海一お意の坂江
 船とてくるいせるとせり女程格あうぐに女房あうぐあ
 娘小よりとたこれし世の廣くあふまうぐあうぐとて強
 とと海一丈ぬの原とてかあおとと後うぐとていひは
 金振とてはとてうぐとてあうとて中とてさうとていひとて

うくるとに枝屋筋末乃とて格高仕出。若くはこれいひ
 掃り自くとて扱びやとて酒をく青かう寝より外も
 一亭主内とて出まうてとて代とて町の親小府とて
 懸るに牀面とてり小志の地集並あうぐいあ乃調のりり
 形り格并寝笑ひ一赤肉美乃格高れ。記る清くあひ
 あとまりあうて親乃子小ゆりせたるあうと札とれり
 ひあり海分敷あ仕けてとて大とての母親ひとけり
 とぬけらとてうぐらへとて身小色る程乃魚をひとらる
 ぞう一懸志記のま子とてあ温記の然なりばあ庭のまぬ
 お果られ。は埋停かか来とてと下向小系大坂乃抱
 山人乃志やまてる風俗とてあうひ法と後せのんともれ
 小ありと格高りふる物とたあうぐれと亭主い時と
 強記出作病とかまへと乃書は生とてかうとと上かた



のりりお女乃こ乃おそまらりて日毎小荷多る程小門
 こゝろ熱小ほこらび計と後小積とてははるばる久
 け家小住あり金銀小傍まれ肉後乃福小神おあま
 ありし時やしく爰えとく警た高賣大狝小代て政
 智屋小かを付廣く人乃金銀かざりり多く終りあつて
 ぬことなゆり志とて交背乃か後小は積くべ記年
 乃當人乃肉後ハ張肉大喉目乃枕打おる海お清拂也
 と育一軟と越ハ的目より自由ありこ一浅也あはは海
 怯付と兼用仕裁ハ七門乃種れ唱時りあはらん
 一みあつてあまびと美吟込これ佳急りこら又あつて
 美とて度多るそれより君と那く門と扣く無常
 海ら人草盛持せさす小判小百ある末年
 先程の所取の因こまの豆板熱取て出分は

110X
328
6